

「部屋」から「家」へ

ジョン・ダンの内面的な世界の発展⁽¹⁾

大槻宏子

ジョン・ダンは、1631年にセント・ポール寺院の大教会長として死んだ。後の人が、彼自身の葬送の説教と呼んだダンの最後の説教、「死の決闘」の口絵は、彼が死ぬまで枕元に置いて眺めたという経帷子姿の肖像、即ち、ダンの *memento mori* である。病中のダスが、自らの意志で、死衣を着て、寒い寝室で炭を焚かせてその肖像を描かせたというウォルトンの記述は、人一倍の苦悩を皺に刻み込んで、老いさらばえながらも異様な迫力を持つダンの顔を一層凄惨なものにしている。しかし、やせた顔に一寸不調和な口唇の厚みは、丁度40年前の、多分20才位の、いささか垢抜けしていないが、自信に満ちた野心家の顔をした、左手には剣の柄を握った軍服姿のダンの肖像を思い出させる。その絵についているスペイン語の格言、「変わらんよりは死なん」は、実に皮肉に響く。なぜならば、二枚の肖像画は、恋愛詩人から、国教会の高僧へというダンの生涯の大きな変化を、如実に物語っているからである。作品で言えば『恋愛詩集』(*The Songs and Sonets*)から『説教』への変化である。この論文では、『恋愛詩集』と『説教』とを建築のイメージを中心に分析して、ダンの内面的な世界の前期から後期への発展を追求したいと思う。題は「部屋」のメタファーから「家」のそれへという意味である。

テーマの位置を明らかにするために、17世紀から現在までのダンの生涯についての研究史を簡単に辿ってみる。ダンの一生は、「ジャック・ダンからジョン・ダン博士へ」という悪名高い公式(実はダン自身が書簡の中で造り出した)が示す様に、彼の詩に劣らず多くの人々を惹きつけた。一言で言えば、ダンの

一生の研究史の鍵は、1614年にダンが牧師になったことをどう解釈するかにある。

伝記作者ウォルトンも、またダンの死を悼んでエレジーを書いた彼の同時代人も、1614年の聖職叙任を、文字通りの改宗と考えていた。17世紀における人間ダンの解釈は、ウォルトンが「英国国教会は第2の聖アウグスチヌスを得た」と書いたように、放蕩者から聖者へという、あの公式通りのものであった⁽²⁾。

18世紀における形而上詩人の運命は、ジョンソンの Cowley 伝にある如くである。19世紀に入って、再びダンが読まれるようになると、人間としてのダンも人々を強く魅了した。そして、華々しい恋愛詩人から敬虔なる牧師へというダンの生涯は、矛盾を含むというよりはむしろ一個のユニークな生涯と考えられた。

今世紀に入ると、前世紀後半から用意された形而上詩復活が、周知のエリオットの1921年の論文を契機にして急速に進展し、ダンの死後百年祭に当たった1931年には、その頂点に達した。それ以後、熱狂的な時期が過ぎると、人間ダンの研究の質も上って来た。その共通の傾向は、17世紀の見解、ダンの生涯を例の公式通り1614年の聖職叙任の前と後に二分する考え方の否定である。つまり、1614年の聖職叙任は、大文字で始まる Conversion、真に宗教的な意味での「改宗」とは殆んど考えられていない。例えばホワイトは、ダンは少なくとも、三度の conversions (カトリックから国教への改宗、秘密結婚、彼自身の死) を経験したと言っている⁽³⁾。ホワイトは conversion を宗教的な意味ばかりではなく、変化という意味で用いており、恋愛詩人から牧師へというダンの一生は、単に一度の宗教的改宗によってもたらされたのではなく、それをも含めて、ダンが何度も変ったと言っているのである。ガードナーは、この様な20世紀の意見を、簡単に、しかも適切に次の様に述べている：

The transformation of the Jack Donne who wrote the *Satires* and *Elegies* into Dr. John Donne, Dean of St. Paul's, was not the result of a sudden revelation of truths unknown before, or of any sudden

moral revulsion. There is no trace of any period of religious or moral crisis in Donne's works. The change was a gradual one, brought about by the circumstances of his life and the maturing of his mind and temperament.⁽⁴⁾

以上の様に、簡単に人間ダンの研究史を振り返っただけでも明らかであるが、ダンの一生を通じての正しい理解に到達するのは、大変困難である。しかし、筆者はここで、ダンの内面的な世界の発展を「部屋」から「家」へという過程としてとらえることにより、彼の一生についての一つの解釈を試みたい。

Ⅰ 小さな部屋：『恋愛詩集』に於けるダンの理想の世界

ベン・ジョンソンは、ダンの恋愛詩のすぐれたものが1590年代に書かれたと言っている。1590年代、つまり20代のダンは、リンカン法曹学院の学生であり、大陸旅行を行ない、エセックス伯のカディス遠征に加わり、又、アゾール諸島へも遠征し、後には、国璽官トーマス・エジャートン卿の秘書になった。有能で野心家のダンは、その能力を十分認められて、当時の有能な有為の青年の望みであった宮廷人としての出世に向かって第一歩を踏み出していた。

又、ダンは、「諷刺詩第1番」で自分の書齋を「木の箱」に例えているが、そこに朝四時から十時までこもって勉強したと、ウォルトンはダンの勤勉振りを伝えている。ダン自身この若い日の知識欲の激しさを後に書簡の中で“an hydroptique immoderate desire of humane learning and languages”と表現している。「木の箱」を十時に出てからの生活は、ダンの友人、R. ベイカーが“a great visitor of ladies, a great frequenter of plays, a great writer of concieted Verses”と描写している。

この様な生活を送ったダンの内面的な世界を解明するためには、『恋愛詩集』の恋愛観を追求しその理想の世界を明らかにすることが必要だと思われる。

第一に重要なことは、『恋愛詩集』の恋愛詩としての特色であり、それは、ベン・ジョンソンとの比較によって一層はつきりする。ジョンソンがローマの

伝統の上に立って、恋愛を道徳的社会的見地から取り上げているのに対して、ダンには常に恋愛の本質は何かを問題にして、ジョンソンの関心は全く示していない。

それでは、ダンにとって恋愛の本質は何であったのだろうか。ここで、ダンの次の様に美しい一行を引用したい：

Let us possesse one world, each hath one, and is one.
 (“The goodmorrow”)

この一行中に、one という言葉が三度繰返されていることに注目しなければならない。ダンは二人の恋人が二人のままに満ち足りていないことに満足しなかった。彼にとって恋愛とは、二人が一つになるものであって、決して「女神を崇拝する男の献身」ではなく、「二人の人間の結合」であった⁽⁵⁾。当時のペトラルカ的な伝統、女神崇拝的な恋愛詩へのこの反抗に、ダンの誠実さがうかがわれる。言葉の上でも、ダンの恋愛詩においてはしばしば、I と thou とが we に溶けこんでいる。ダンが「一つになること」という恋愛の理想をどんなに激しく求めたかは、上の一行のみならず、『恋愛詩集』中で、one という言葉や、one をあらゆるイメージが、いわば偏執狂的なまでに繰返されているという事実により、自ら明白である。

次に問題になるのは、ダンの恋の理想、one の本質である。彼は普通の程度の one には満足できず “Thou which art I” の状態を飽くことなく求め続けた⁽⁶⁾。一見人を驚かす「私であるあなた」とは、ルネッサンス時代の友情及び恋愛の理想——二つの魂の完全な結合——であり、それはネオ・プラトニズムの伝統的な考え方であった。「私であるあなた」の境地は、決してダン固有のものではないが、それを、彼ほど真剣に、かつ徹底的に求め続けた人物は存在したのだろうか。

しかしながら、二人がぴったり一つになるというダンの理想は、本質的に自己矛盾を含んでいる。如何にお互いに愛し合っても、各々異った人格を持つ二

人の人間が、完全に一致することは、現実的に不可能なのである。現実と理想との間のこの大きな食違にもかかわらず、ダンの完全な one への志向は、大変激しいもので、それだからこそ、強大な自我の持主ダンは、一層深く苦悩したのである。しかし、ダンが実際にどのような恋愛をしたかは別として、このような激しい彼の悩みは、或る意味では現実の恋愛からの逃避であったとも考えられる。

この様に、ダンは恋に於ける極めて徹底的な完全主義者であり、理想主義者であった。『恋愛詩集』では、ダンの理想、即ち完全な「一」を成就させてくれる女性は、例えば「世界の魂」などと法外に崇められているのに、裏切りや偽りでそれを破壊したり傷つける女性は、残酷なまでに痛烈に皮肉られ軽蔑されている。ダンの女性に対する感情のこの振幅の大きさは、彼の恋愛における理想主義に由来するものと判断できる。理想が高ければ高い程、理想がかなえられない時の絶望は激しく、強く愛すればそれだけ裏切った人への憎しみも深まるからである。ジョン・ベネットが指摘するように、ダンの理想主義とシニシズムは、同一のものの積極的な面と消極的な面であり、彼は他の詩人の及ばない程それを具現したのである⁽⁷⁾。

恋愛における、いわば最上級の理想主義者、完全主義者ダンは、「おはよう」(“The good-morrow”)の中で、二人の恋人の作る完全な one (一)は many (多)より純粋であるから、神や純金同様に永遠の生命を持つのだと言っている。そしてこのことはハーメティシズムの伝統的な考えに基いた one を実現した恋人達の時間の意識にほかならない。時間の意識は当然死の意識を呼び起こし、生は死の意識を得てはじめて、真の意味で生となる。「一周年記念」(“The Anniversarie”)は、丁度それを主題にしている。ダンは、その中でアウグスチヌス以来の永遠の概念を導入して、次のように言っている。即ち来世に於けるキリスト教的な幸福は、自分達二人にだけでなく、すべての人々に与えられるが、この地上では、one を実現した自分達二人だけが幸福なのだから、一生は短かくても、その間中ずっと、気高く愛し合って、何度も二人の

恋の記念日を迎えようと、「一周年記念」と同じ主題の「コリンナは花摘みに」(“Corinna’s going a Maying”)の中でヘリックは、人生は短いから、時が許すうちに楽しもうという異教的な、ダンとは全く反対の結論を出しており、「はにかむ恋人へ」(“To his Coy Mistress”)に現われたマーヴェルの永遠の意識はダン程明確ではないのを見ると、ダンの「一周年記念」の成熟度が理解される。

ダンの理想的な one の特質の一つは、次の四行に表現されている：

But we by a love, so much refin’d,
That our selves know not what it is,
Inter-assured of the mind,
Care lesse, eyes, lips, and hands to misse.
(“A Valediction: forbidding mourning”)

refine は、勿論錬金術用語で、不純物を取り除いて純粋な要素だけにするという意味を持つ。上の引用は、恋によって洗練された完全な男女の結合は、恋人達に各々の性の区別を超越させるものだと言っている。同じ主張は、「聖列加入」(“The Canonization”)の25行目、「恍惚」(“The Extasie”)の29行目から31行目に繰返されているが、実にこれは、ダンの完全主義の極限である。しかし、この境地も矛盾を含んでいる。というのは、恋愛とは本来、異性間の性の違いを前提としているものであるからだ。このように、二重の矛盾——one 自体の持つ非現実性と性の区別を超越したいという要求の非現実性——にもかかわらず、ダンが完全な one を求め続けたのは、やはり、現実の恋愛からの逃避であったと同時に、ともすれば彼からはみ出しがちな強大な自我からの逃避であったと思われる。ラブジョイが指摘するように、伝統的にも“the One”(一者)への憧れは“I am I”という自意識の重荷から逃れたいという欲求のあらわれであった⁶⁾。ホワイトは、ダンの並はずれて巨大な自我を「いつの時代に生きたとしても、自己との葛藤をひき起こしたと思われるつむじ風」と評し、それだからこそ彼は誰にもまして、何ものかに「属する」ことが必要だったと言

っている⁽⁹⁾。

それではダンが、どんな女性に「属する」ことを望んだのだろうか。『恋愛詩集』の女性は皆名前が無い。即ち、特定の一個人というよりは、女性の普遍的な像である。彼女は終始沈黙を守っているのに、詩人が彼女に語りかけるとい形式は、詩の中に常に彼女を存在させている。しかし、どの詩にもみられる頻繁なIの繰返しが、いかにダンが自分自身に憑かれていたかを証明しているように、『恋愛詩集』の多くにおいて、形式的には恋人へ語りかけているとはいへ、実はダンが自分自身に愛の哲学を語っていたのではないだろうか。

途方もなく誉め称えられている女性については、当時のペトラルカ的な eulogy の伝統を忘れることはできない。「熱病」(“A Fever”) で “But when thou from this world wilt goe,/The whole world vapors with thy breath./ Or if, when thou, the worlds soule, goest,/It stay, tis but thy carkasse then…” と崇められている女性像は、後に二つの『記念祭歌』(“The Anniversaries”) で描かれている女性像につながると考えられる。例えば『第一記念祭歌』の427行目と428行目は “Shee, shee is dead; when thou knowst this,/Thou knowst how drie a Cinder this world is.” とある。この二行のような、いわば普通ではない女性の描写についてベン・ジョンソンが、「もしマリア様について書かれたならば、『記念祭歌』はひとかどの作であるが、そうでなければ冒瀆も甚しいと」批評した。それに対して、ダンは「普通の女性ではなく、『女性のイデア』を描いたのだ」と答えたと、ドラモンドは伝えている⁽¹⁰⁾。ダンがどこまで本気で答えたかはともかく、『恋愛詩集』の女性については、重荷になりがちな自我から脱け出して完全に没入できる絶対的なものとしての one を一緒に実現してくれる女性を求めてやまなかった彼の言葉として受け入れてよいのではないだろうか。

さてここで、ダンの恋愛の理想を支えた価値観をとりあげて、ダンの恋愛観とその理想の世界、小さな秘密の部屋との関係について述べたい。第一に、再び「おはよう」の一行を引用しなければならない：

Let us possesse one world, each hath one, and is one.

この一行には、明きらかに、伝統的なマイクロコスム（小宇宙）・マクロコスム（大宇宙）の理論による価値観があらわれている。即ち、小宇宙である人間は小さくても、大宇宙である世界のうつつで、大宇宙の価値をそっくりそのまま持っているという考え方である。ダン自身ホーリー・ソネット第5番の冒頭で、“I am a little world made cunningly/Of Elements…”と表現している。それでは、「おはよう」の上の一行の前の二行を引用しよう：

Let sea-discoverers to new worlds have gone,
Let Maps to other, worlds on worlds have showne…

この様に、ダンは大宇宙より小宇宙を選んでいる。worlds という複数形は、当時の「世界の複数性」の概念の反映である。新大陸発見時代には、新世界は世俗的な富の象徴であったが、ダンはそれをも拒否している。

「おはよう」では更に、おたがいに相手の顔をうつす二人の恋人の瞳は半球に譬えられ、揺がない愛情で結びついた彼等の二つの半球こそ地球よりもすぐれているとダンは言う。又、じっと見つめ合う恋人達の瞳に映ずるお互いの小さな姿や「別れの歌：涕泣」（“A Valediction: of weeping”）の一滴の涙にうつる恋人の小さな像に、ダンはすっかり魅せられている。目の中の、或いは涙にうつる小さな姿と人間との間には、人間と世界との間の小宇宙と大宇宙の対応関係がそのままひき移されており、「小さな像」は、いわば、「小小宇宙」、又は、「目の中の小宇宙」と言うべきであろう。ダンの夢中になった目の中の小宇宙は、実際は恋人の瞳にうつる自分の姿なのである。恋人とじっと見つめ合っている時でさえ、自分の姿を見ているダンは、実に egocentric な人間である。

以上のように、「おはよう」にあらわれているダンの価値観は、大きく膨張しつつあった新世界（大宇宙）よりは人間（小宇宙）を、実際の地球（geocosm）よりは相手の瞳にうつる恋人達の顔（小宇宙）を、人間（小宇宙）よりは目の

中の小像(小宇宙)を、と小さいものの方向へ向かっていることがわかる⁽¹¹⁾。つまり、ダンは小宇宙は小さくても大宇宙と同じ価値を持つどころか、それ以上の価値を持っていると考え、ルネッサンスの伝統的な価値観を全く逆転した価値体系を作っている。それについてダンは、後に書いた *Devotions* の一節で次のように述べている:

It is too little to call man a little world; except God, man is a diminutive to nothing. Man consists of more pieces, more parts, than the world. . . . for, as the whole world hath nothing, to which something in man doth not answer, so hath man many pieces of which the whole world hath no representation.⁽¹²⁾

このダン特有の価値観は、「聖列加入」の次の六行に大変美しく表現されている:

And if unfit for tombes and hearse
 Our legend bee, it will be fit for verse;
 And if no peece of Chronicle wee prove,
 We'll build in sonnets pretty roomes;
 As well a well wrought urne becomes
 The greatest ashes, as halfe-acre tombes...

ここに於てもやはり、ダンの新世界嫌い、即ち俗世間的な価値、例えば名誉や富の否定が、彼独自の価値体系と密接につながっていることは明らかである。精巧に作られた骨壺は小さくても、広大な墳墓と同じ位に、否それ以上に、恋によって聖者の列に加えられた恋人達の灰を取めるのにふさわしいのである。ソネットの中に美しい部屋を建てようとは、何と心を打つ一行だろうか。『恋愛詩集』の恋人達は、どこにもまして、居心地の良い、きれいで小さな秘密の部屋が好きで、そこは彼等の理想の世界である。「おはよう」の恋人達も、広がりゆく世界から隔離した小部屋こそが、実は、本当に全世界以上の価値を持つのだと考えて“For love... makes one little roome, an every where.”と語る。「日の出」(“The Sunne Rising”)の恋人達も又然りである。彼等は

「おはよう」の恋人達同様、自分達を世界より大きな価値を持つ小宇宙とみなして、古いぼれの太陽は彼等のひきこもっている小部屋を照らせば全世界を照らしたことになる。トレミーの天文学により、部屋にあるベッドは太陽の軌道の中心に位置する地球の小宇宙であり、部屋の壁はその天球層であると言う：

Thou sunne art halfe as happy'as wee,
 In that the world's contracted thus;
 Thine age askes ease, and since thy duties bee
 To warme the world, that's done in warming us.
 Shine here to us, and thou art everywhere;
 This bed thy center is, these walls, thy sphaere.

以上考察した通りの恋愛における理想主義者、完全主義者ダンにも、いわばリアリストとも呼ぶべき一面があり、「恍惚」にそれをうかがうことができる。この詩についてなされている多くの議論はその前半と後半の一見相矛盾する内容に由来する。前半は文字通りのエクスタシーを描いている。恋人達の二つの魂が体から脱け出て、お互いを高めるために交渉し、ついには一つに結合して、モノローグで “Wee.../Are soules, whom no change can invade.” と精神主義の愛の哲学を述べる。すると、すぐ次の後半の第一行目で「しかし、何故こんなにも長い間僕達は肉体を禁じなくてはいけないのか」と反対の極の恋愛論を展開し、僕達の様に一つになった魂の「一つの対話」を聞いた人があれば “Let him still marke us, he shall see/Small change, when we're to bodies gone.” と結論している。問題は、前半の結論の “no change” と詩全体の結論の “Small change” との関係である。ダンの恋愛観は、イタリアの新プラトン主義の影響を受けて精神を重んじる傾向はあっても、精神主義一辺倒でもなく、又、その逆でもない。ダンは肉体と精神の本質と機能を、天使学や錬金術や当時の天文学で定義している。体は人間のものであるが人間そのものではなく、丁度純金が卑金属とまぜ合わされて強くなるように、pureな精神は less pureな肉体によって、強くなる。そしてそれ自体では無力な魂の働きをひらき示すのが肉体の機能であると、the Book of the Creatures の伝統を導入して説明す

る。この様に、本質的にも機能的にもダンは less pure な肉体を認めている。問題の“no change”から“Small change”への変化は、one の purity の主張から less pure なものを認めるというダンの態度の変化に対応し、川崎寿彦先生はこれを、「不純への決意」と考えられている⁽¹³⁾。

ダンの恋愛の理想は二人の恋人が完全に一つになることで、強大な自我の桎梏から自由になろうとした彼は、殆んど偏執狂的なまでにそれを追い求めた。つまり「一」の意識は、自己への意識であると同時に、絶対者への憧れであった。恰も中世の修道僧が僧院の小部屋で、死後に神(the One)と一体になることを瞑想したように、ダンは社会とは全く隔絶した秘密の小部屋に恋人と共にひきこもって、彼の理想を実現しようとした。20代のダンは、活動的な生活を送ったけれども、内面的には、反社会的な反時代的な傾向を強く持っていた。このことは、「小さな部屋」を世界以上の価値があるとする、ダンの伝統的な価値観の逆転の仕方にも明白にあらわれている。

Ⅱ 神の家：『説教』に於けるダンの理想の世界

1601年にダンは秘書として仕えていたエジャートンの妻の姪アンと秘密結婚した。アン之父は怒りのあまり、エジャートンにダンを解雇させた。このために、ダンの野心、即ち宮廷での出世への道は全く閉ざされ、結果的には、この時ダンは教会への第一歩を大きく踏み出した。1615年に牧師に任命されるまで、彼の失業は、次々と生まれた子供達が病気がちのせいもあり、物質的にも精神的にも惨めな生活をもたらした。しかし、彼は終生アンとの結婚を悔いることなく、彼女の死後も再婚しなかった。

1605年から1607年まで、ダンはトーマス・モートンのカトリックとの論争を手伝った。この事実から、聖トーマス・モアの血を母方から受け継いだ生まれながらのカトリックのダンも、この頃には相当国教に傾いていたと判断される。当時の宗教的混乱の中で、彼の伯父は国外へ追放され、彼の弟はカトリックをかまくまったかどで、獄死した。それにもかかわらずダンは、ホワイトが言

うように自分の周囲の悲しむべき状況を変革するよりはむしろ、社会をあるがままに受け入れて、その中で自分の野心を遂げたいと思った形跡がある⁽¹⁴⁾。若い日のダンの勉強振りは前に述べたが、彼の神学の勉強は、「諷刺詩第三番」とウォルトンの伝記 (p. 25) にある通りである。このような努力によって得られた神学の知識、法律への造詣、言葉の駆使力は、彼をモートンの非常に優れた助手にした。ダンの困窮振りを見かねたモートンは、1607年に牧師になるようにダンにすすめたが、彼は断っている。断りの理由として自分には資格がない等々と、ダンは言っているのをみると、苦しい生活にもかかわらずダンは世俗的出世への野心を捨てきれなかったのだと考えられる。

子供もダンも共に病気の時には、ミッチャムの彼の借家は文字通り病院で、手紙には「ミッチャムの我が病院より」と書いている。結婚前のダンには「小さな秘密の部屋」に満足できたが、壮年期の彼には、外の世界から遮断されて狭い書齋に閉じこもることが、大変な苦しみになっていた。彼はやはり手紙に、「ミッチャムの牢獄」とも書いた。ダンは友人への手紙の中で、自分の現在の無為の状態に対して、人間として、夫として、父としての責任を果たすために、何かをしなればと、真剣に彼の行動への意欲を語っている。彼は具体的に何をなすべきかは、決めかねていたが、どのように行動すべきかは彼にとってはっきりしていた：

For to choose is to do; but to be no part of any body is to be nothing. At most, the greatest persons are but great wens and excrescences... except they be so incorporated into the body of the world that they contribute something to the sustenation of the whole.⁽¹⁵⁾

ここには、紛れもなく「小さな部屋」からの脱出の意志がある。ダンは外の世界を認め、その一部分になって自分の行動を通じて全体のために寄与したいと考えている。又、所謂ミッチャム時代に書かれ始めた宗教詩、例えば、“When wee mov'd to seeme religious Only to vent wit, Lord deliver us.” (“A Litanie”)には、初期の諷刺詩のシニシズムの影は消えている。

秘密結婚から牧師になるまでの、いわば中期のダンの思想は、1611年と翌年に書かれた二つの『記念祭歌』にあらわれている。それらは、若くして死んだ富豪の娘、エリザベス・ドリュアリーのために書かれたのだが、ダンには、一面識もなかった彼女の死を嘆きつつ、同時に彼自身の内面的な世界も吐露した。川崎寿彦先生の解釈によれば、最初の詩が悲しみ、次の詩が慰めを主題として、エレジーの形式で書かれた姉妹詩で、*contemptus mundi* を主題とする前者には、エリザベスの死の悲しみと共に、ダンの野心の挫折がうたい込まれ、天国での幸福というキリスト教の希望を主題とする後者は、彼女の類い稀な美德は天国で完成されるので、彼女の死は loss ではなくて gain だと説き、死によって自由になったダンの魂の天国への旅も描いている⁽¹⁶⁾。ダンの過去と現在の自分に対する態度は、*contemptus mundi* であり、未来のそれは、天国の瞑想であった。前者から後者への変化は、恋愛詩人から宗教詩人へのダンの変化と一致している。

1607年以後も、教会へのすすめは二度あったが共に断わり、一度は自らの決心にもかかわらず実現しなかった。ハーバートの伝記にあるように、牧師という職業は、当時は、社会的威信の高いものではなかった事実も一因であろうが、結局、世俗の出世への望みが断ち切れず、迷いに迷ったあげく、彼は1614年12月に遂に牧師になる決意を固めた。これには、彼の *Pseudo-Martyr* (1610) 以来ダンの神学を高く評価していたジェームズ一世の強い意志が反映しており、生活上の必要からもダンは宗教界入りを決意したのであろう。*Essays in Divinity* (1615) には、この間の彼の信仰上の経緯があらわされている。

さて、牧師になったダンは、雄弁な説教で大変人気を博し、第二の聖クリストモス (golden-mouthed) ともてはやされた。ウォルトンは、説教壇上のダンを次の様に描写している：

A Preacher in earnest; weeping sometimes for his Auditory, sometimes with them: always preaching to himself, like an Angel from a cloud, but in none....⁽¹⁷⁾

牧師になるかならないかで、あれ程考え、悩み抜いたダンも、一度決心がつくとそれまでの遲疑逡巡などなかったかの様に一心に仕事に打ちこんでいる。彼の説教の下調べに示した熱意は、十分それを証明している。ダン自身後に、「私の第二の誕生」と牧師になったことを書いている⁽¹⁸⁾。彼は、結婚によって秘書を解雇されてから約15年間は、十分な才能と意欲を持ちながら、自己を発揮する適当な場がなかったが、牧師になってはじめてそれを説教壇に見出したのである。彼はそこから会衆に語りかけて、彼等全部を天国へ導くという役割に、それまで蓄積して来たすべてを注ぎ込んだ。ウォルトンの描写通り、彼が自分自身に対して説教しているのも事実である。彼が説教に対して示した真剣さ、誠実、熱情は、それまでの閉鎖的な生活からの解放の喜びのあらわれであり、或る意味では、彼の自己顕示欲の激しさの証明であるとも考えられる。

説教にあらわれている後期のダンの重要な特長の一つは、完全主義からの脱皮である。『恋愛詩集』の非現実的な one の理想を、それと知りつつ求めずにはいられなかったダンも、遂に形而上的世界と形而下的世界の間の矛盾を認めている。一例をあげれば、『恋愛詩集』のコンパスの描く円は完全の象徴であったが、LXXX Sermons の第67番では、コンパスは羅針盤を意味し、羅針盤が常に真北を指さなくても船は正しく目的地まで航海するから、という実用的な見地から、羅針盤の不完全さ、即ち誤差を認めている。このダンの完全主義の放棄には、苦しい長い試練を経て来た彼の maturity があらわれていると考えられる。

前期の『恋愛詩集』の one の意識にかわって、後期の説教には many の意識があらわれている。many の意識とは、「他者」に対する意識であり、又「参者」に対する意識でもある。『恋愛詩集』の wee は、I と thou (二人称単数) で構成されていたが、説教では、牧師であるダンの I と、彼の導く会衆 you (二人称複数) で wee が構成されている。又、one の意識は「小部屋」での瞑想と社会からの逃避を特徴とするが、many の意識は行動の原理と結びつき、社会と密接につながっている。即ち、ダン は、全体の一部となって全体

のために働く場として説教壇を認識しており、説教でも度々、自己の牧師としての任務について述べている。これは、ダンの仕事への誠実さであると共に、彼自身、自分の仕事について自覚を新にするために必要であったと考えられる。

ダンが説教を、神と人間とを結びつけるものとして考えている：

There is no salvation but by faith, nor faith but by hearing, nor hearing but by preaching...⁽¹⁹⁾

説教の重要性のこのような認識が、説教者の義務と責任の強い自覚となって、若い時に劣らずダンを勤勉にした。ウォルトンの伝えるように、*a door-keeper in the house of God* として喜びをも感じていたダンには、自分一人だけではなく、自分の導いている会衆の全部と一緒に救われたいと願って、懸命に努力を重ねた。説教の平易な文体には、多くの人々に理解されるように骨を折ったあとが見える。このような many の意識は、ダンが1619年にドイツへ行った時行なったお別れの説教の一節に表現されている。当時ダンは心身共に衰弱していたので、彼自身も彼の友達も、この仮の別れが本当の別れになるのではないかとひそかに恐れていたことを思うと、言葉は一層切実に響く：

... remember me, not my abilities... but remember my labors, ... at least my desire, to make sure your salvation... if I never meet you again till we have all passed the the gate of death, yet in the gates of heaven, I may meet you all, and there say to my Saviour and your Saviour... *Of those whom thou hast given me, have I not lost one.*⁽²⁰⁾

これは丁度、マタイ伝18章の百匹の羊のうちの迷った一匹の羊の譬話の教えと一致した内容を持っている。

更に注目すべきは、ダンの many の意識が、単に自分の率いる会衆だけに限られず人類にまで広がっていることである。又人類は歴史的にアダムまで溯って考えられ、その上でダンは自己を全人類の一員として位置づけている。この思想を最も印象的に表現しているのは *Devotions* の次の有名な一節である：

No man is an *Island*, intire of itself; every man is a piece of the *Continent*, a part of the *maine*; If a *Clod* bee washed away by the *Sea*, *Europe* is the lesse, as well as if a *Promontorie* were... any mans *death* diminishes *me*, because I am involved in *Mankinde*; and therefore never send to know for whom the *bell* tolls; it tolls for *thee*.⁽²¹⁾

島と大陸の比喩が、ベーコンの『随筆集』の「善について」の中でこれより早く用いられていることに関しては、松浦嘉一博士が正しく指摘されている⁽²²⁾。ダンにあっては、島と大陸とは、one の意識と many のそれとの実にすばらしいメタファーである。

上述のダンの many の意識は、「神の家」を理想の世界としている。ダンには、建築のメタファーがなかなか気に入っているようで、ウェッパーはその理由を "...because by the use of the word "edify", he could make it a metaphor of itself, describing spiritual and physical building as if they are the same thing..." と述べている⁽²³⁾。「神の家」とは天国のことで、ダンのように、天国を「神の家」と考える思想の起源は、ヨハネ伝14章の2節である：

In my Father's house are many mansions; if it were not so, I would have told you; for I go to prepare a place for you.

O.E.D. によれば mansions という複数形は「部屋」を意味し、比喩的な mansion の意味は、魂をとじこめる肉体、つまり魂のすみかであり、上の一節にはこの二義が含まれていると解釈される。このように、天国を「神の家」と考えているのは聖書の中でもここ一カ所で、この考え方は、ネオ・プラトニズムの伝統に属するものである⁽²⁴⁾。ダグラス・ブッシュも、トーマス・ブラウンを論じて、"It is the Christian Platonist who thinks continually of the soule imprisoned in its earthy house..." と述べている⁽²⁵⁾。ここでさらに *Faerie Queene* の House of Temperance (Bk. II, Canto IX)、『天路歷程』の Interpreter's House、ジョージ・ハーバートの「教会の床」、マーヴェルの「庭園」

等で、肉体が魂の家であると考えられていることを想起したい。

ヨハネ伝14章の2節をテキストにして、ジェイムズ一世の御前で行なわれた説教、*LXXX Sermons* の第73番で、ダンが魂の最上の家と考えた「神の家」の五つの特徴が述べられている。第一に、神の家は、何ものも揺がすことのできない安全な家であり、第二に、それは多くの人々のものである。我々は皆、違う日に違う方法で別れるけれども、万人復活の日には再会し、その時には、この地上に生きていた時よりずっと多くの人々と知り合い (*LXXX Sermons* 第19番)、神の家で我々が愛し合えば、喜びと救いは我々の人数倍だけ増し (*Fifty Sermons*, 第50番)、全部の魂が、まるで一つの魂であるかのように編み合わされて、神はどの魂にも完全に結びついているので、恰も、魂の数だけの“many Gods”があるようだ (*LXXX Sermons*, 第73番) とダンが説いている。“many Gods”は、プラトン主義の二つの神のうちの一つで、ダンの many の意識からの当然の帰結である⁽²³⁾。ダンの人類全体にまで広がる many の意識と、あのような宗教的混乱の時代には危険をとまなつたのではないかと思われる宗教的寛容とは、異邦人達にさえ神の家に「はなれ」(out-houses) として部屋を与えている⁽²⁷⁾。第三に、mansion の語原 manere ‘to remain’ にさかのぼって、神の家の永遠を説く。永遠への志向の裏側は *contemptus mundi* の態度で、永遠にくらべれば、長寿のメトセラも、一晚のうちに急速に成長するきのこに過ぎず、国王の権力も女王の美しさも、一朝の六時、七時、八時、に群れ咲く花壇の花に過ぎないのである。第四に、神の家は、すべての家のモデルなのであり、「うつし」ではない。ここには、もはや前期の、外の世界そのものより、その「うつし」である「小部屋」を選んだダンの価値観はみられない。後期のダンは明らかに、家の「うつし」ではなく、家のモデルを選んでいる。第五に、神の家は、社会と他人への義務からの逃避の場であるような修道院の小部屋の集まりではなく、“an expansion of many Houses into a City of living God”なのである⁽²⁸⁾。

この後期のダンの理想の世界である「神の家」は、ダンの個人的な思想の発

展の結果であると同時に、当時の英国の歴史的な方向と密接に結びついたものであった。英国においては、歴史が最も急速に進行したのは、今世紀を除けば、1600年から1660年の間で、市民階級の擡頭、産業主義、資本主義は、英国を近代の方向へ向かわせていった。それで封建体制の崩壊後、人々は別な秩序を必要とし、それが他者への意識と、行動によるその意識の実現であった。しかし、経済的には、資本主義的生産様式がとりいれられるようになったが、中世と変わらず public gain は依然として個人的な利益に優先していた。周知のように、当時の宗教と政治とは不可分の関係にあったので、国教会は、内には清教徒を、外にはカトリックをひかえて非常に不安定な状態にあり、宗教的な紛争から生じる civil disorder を極度に恐れていた。カトリックの火薬陰謀事件(1605年)の翌年には、忠誠の誓(the oath of allegiance)が出るという、宗教的統一が即ち政治的な国家の統一である時代に、多くの牧師達は説教を通じて神や国王や“spiritual and civil magistrate”に対する“joint reverence”をひきおこすように努力した⁽²⁹⁾。

このような時代に、many(他者、多者)への意識を説いたダンは、国教会の牧師として英国のために、自分の義務を実によく果たした。当時の英国社会は、対外的にも対内的にも、封建制の枠がゆるんでばらばらになった個人を、神や国王を中心として結集することが必要であった。ダンは、英国を君主との会見の順番を待つ宮廷の廊下に譬えて次のように言う：

Let the whole world be in thy consideration as one house... Let this Kingdome... be the Gallery, the best room of that house and consider in the two walls of that Gallery, the Church and the State... Let thine owne family be a Cabinet in this Gallery... and then lastly, let thine owne bosome be the secret box, and reserve in this Cabinet... peace in the Church, peace in the State, peace in thy house, peace in thy heart, is a faire Modell, and a lovely designe even of the heavenly Jerusalem which is *Visio pacis*, where there is no object but peace.⁽³⁰⁾

教会、国家、家族、そして個人という整然たる社会秩序の描写と、peaceの繰

返しは、当時英国でどんなに *civil order* が望まれていたかを十分示している。

ここで最も注目すべきは、平和で調和のとれた英国が「神の家」へ続く最も立派な廊下であり、又、「神の家」の「立派なモデル」、「美しい雛形」と考えられている点である。先に述べた如く、「神の家」は地上の家のモデルであったが、ここでは、英国が、そのモデルのモデルと考えられている。ここには、『恋愛詩集』の理想の世界である「小さな部屋」を支えた、伝統的な大宇宙—小宇宙の対応の理論を逆転したあの価値観がそのままあらわれている。重要なことは、伝統的な価値観の裏返しを、ダンが二つの正反対の考え方の根拠に用いていることである。つまり、「小部屋」の肯定=社会の否定と、「神の家」のモデルとしての英国社会の肯定を、同一のレトリックで述べていることである。今まで主に問題にした *LXXX Sermons* の第73番は、1621年に行なわれた説教であったが、それから四年後にチャールズ一世の御前で、詩篇11章の3節をテキストにして行なわれた説教は、1621年の思想をさらに明確に表現している。今度は、教会、国家、家族、そして個人は各々「家」に譬えられ、四つの家の共通の基礎は神である：

... when wee speake of *Foundations*, wee intend a *house*: and heere, wee extend this *House* to foure Considerations; for in foure *Houses* have every one of us a dwelling. For, first, *Ecclesia Domus*, the *Church* is a *House*, it is *Gods House*.... Secondly, *Republica Domus*, The *Commonwealth*, the *State*, the *Kingdome* is a *House*... in this *House* *God* dwells.... Thirdly, There is *Domus Habitationis*... a *House* to dwell in, and to dwell with, a *Family*: and in this *House* *God* dwells too.... And then lastly, there is *Domus quae Dominus*, a *House* which is the *Master* of the *House*; for as every *Man* is a little *World*, so every *man* is his owne *House*, and dwels in himselfe: And in this *House* *God* dwells too...⁽³¹⁾

次に、彼はこの四つの家の個別的な基礎を論じている。教会のそれは、キリス

ト、聖霊、教父達で、教会の建物を建築するのに資金を出す国王や、実際に労働をする人々をも含めているのは、いかにもダンらしい。国家の特別な基礎は法律であり、英国に生まれながら英国王への忠誠を誓わない者は国家の基礎、即ち法律を破壊する者であるという王権神授説擁護の立場が表現されている。それには宗教改革を促進した英国の国民感情、即ち外国勢力による支配への強い反対がうかがわれる。家族の特別な基礎は平和であり、それは家族全員が各々の義務を完全に遂行することによってではなく、お互いの欠陥を支え合うことによって得られると説いている。個人の特別な基礎は良心であり、その二要素は実践と知識である。善をそれと知らず行なうことは善を悪しく行なうことであると、盲目的な実践をいましめ、又、自分の良心の平和だけでは不十分で、他人の為に行動しなければならぬと行動の原理と結びついた many の意識を主張している⁽³²⁾。そして、自己の職業を通じて他人の役に立つことにより、良心が救いを受けるために望ましい状態になる以上、この世の利潤追求とあの世での救いとは、決して矛盾しないのである。これこそ、プロテスタンティズムの倫理にほかならない。ヴァージニアへの植民者達へのダンの説教には、この倫理が国家的な規模で表明されている。英国が、古い世界と新大陸とを結ぶ Gallery であり、同時に、新大陸と天国、「神の家」とを結ぶ Gallery であるから、アメリカから船が帰る度毎に、珍しい積荷と共に、何人のインディアンがキリスト教に帰依したかをも聞きたいものだと言っている。

先にふれた1621年の説教、その発展と考えられる1625年の説教、及びヴァージニア植民者達への説教は、ダンが生きている間に出版された六篇の説教に入っている。この事実からも、英国を「神の家」のモデルと考え、英国の社会構造を四つの家に秩序整然とおさめるダンの国家観が、当時如何に政治的に有意義であったかは十分推察される。

このように、ダンは全体、即ち英国の一部として、説教壇から、熱心に誠実に、かつ成功を取めて、多くの彼の会衆に、他人のためにも自分の救いのためにも、行動に立ち上るように説いた。これが即ち、ダンの多者への意識であ

り、他者のための行動であった。

しかし、忘れてはならないのは、ウォルトンも述べている、ダンのいわば自分のための説教と思われる部分についてである。まず第一に、1617年の妻の死に際して書かれたというホーリー・ソネット第17番の冒頭四行を引用しよう：

Since she whome I loved, hath payd her last debt
To Nature, and to hers, and my good is dead,
And her soule early into heaven ravished,
Wholy in heavenly things my mind is sett.

ダンの妻への愛情の深さは前述の通りである。妻アンとの one が彼女の死によって終って、ダンも神との one を強く望んでいる。このソネットにあらわれている彼の神へ向かう決意は大変固い。このように、彼の何ものかに「属すること」への志向は、その対象こそ変れ、終生消えることはなかった。説教においても、前期同様、神との完全な合一を激しく求めているダンは、最後の審判の後に、復活により自分の肉体がはじめて自分のものとなったその時には、神の肉と同化したいとさえ述べている：

But in heaven, it is... *My flesh*, my souls flesh, my Saviours flesh.
As my meat is assimilated to my flesh, and made one flesh with it;
as my soul is assimilated to my God, and *made partaker of the divine nature*, and *Idem Spiritus*, the same Spirit with it; so, there my flesh shall be assimilated to the flesh of my Saviour, and made the same flesh with him too. (*Fifty Sermons*, 第14番)

ダンはじっと神のことを思う時の神秘的な喜びを "...like a Lily in Paradise, out of red earth, I shall see my soule rise out of his blade, in a candor, and in an innocence, contracted there, acceptable in the sight of his Father." (*LXXX Sermons*, 第27番) と表現しており、ダン特有の陶醉が力ある言葉から伝わって来る。

しかしここで、ダンの次の一節に耳を傾けたい：

... There is our *Nos*, *We*, testimonies that we are in the favour, and

care of God ; We, our Nation, we, our Church ; There I am at home ; but I am in my Cabinet at home, when I consider, what God hath done for me, and my soule ; There is *Ego*, the particular, the individuall, I. (LXXX Sermons, 第34番)

このように、後期のダンの世界には many の意識と one の意識とが併存していた。

Ⅲ 結 論

軍服姿の肖像のダンから、経帷子の肖像のダンまで、つまり『恋愛詩集』から『説教』までの約40年間のダンの内面的な世界の発展は、「小さな部屋」から「神の家」へであった。

恋愛における完全主義者、理想主義者ダンは、秘密の小部屋に閉じこもって、中世の僧の様に、the One を求め、その中に強大な自我を埋没させることを望んだ。one への意識は一者への志向であり、自己への意識でもあった。小さな部屋は、自我からのみならず、現実と社会から逃避の場で、そこには、ダンの伝統的な大宇宙、小宇宙の理論を逆転した価値観があらわれている。

牧師としてのダンは、完全主義を克服して、ヨハネ伝14章の2節のネオ・プラトニズム的な思想をもとにして many の意識を「神の家」で具現した。又、英国こそ「神の家」の理想型と説いて、当時の英国の歴史の流れる方向に向かい、国教会の牧師として、積極的に働いた。ダンの英国社会肯定というよりは、むしろ英国の賛美は、実に前期の社会の否定を支えたと同じ価値観、即ち伝統的価値観を逆にした価値体系によって支えられているのである。

しかしながら、後期のダンも、やはり前期同様に完全なる one を強く求め、自分自身の小部屋にこもって、じっと神を思った。つまり、後期のダンには、「神の家」と「小さな部屋」とが、即ち many の意識と one のそれとが共に存在していた。ここでダンの「牧師になった後のティルマン氏へ」(“To Mr. Tilman after he had taken orders”)を引用しよう：

Art thou the same materials, as before,
Onely the stampe is changed; but no more?

註

- (1) この論文は昭和40年1月に提出した筆者の修士論文の要約である。
- (2) I. Walton, *The Lives of John Donne, Sir Henry Wotton, Richard Hooker, George Herbert, and Robert Sanderson* (London, 1962), pp. 47-48.
- (3) H. C. White, "The Conversions of John Donne," *The Metaphysical Poets* (New York, 1956), pp. 93-120.
- (4) H. Gardner, ed., *John Donne: The Divine Poems* (Oxford, 1959), p. xx.
- (5) H. Gardner, ed., *The Metaphysical Poets* (Penguin Books, 1959), p. 25.
- (6) H. J. C. Grierson, ed., *The Poems of John Donne* (Oxford, 1958), Vol. I, p. 175.
- (7) W. R. Keast, ed., *Seventeenth-Century English Poetry* (New York, 1962), p. 111.
- (8) A. O. Lovejoy, *The Great Chain of Being* (New York, 1960), p. 29.
- (9) H. C. White, "John Donne and the Psychology of Spiritual Effort," *The Seventeenth Century: From Bacon to Pope*, ed. Jones, F. R., and others (Stanford, 1951), p. 355.
- (10) H. W. Garrod, *John Donne, Poetry and Prose with Izaak Walton's Life, Appreciations by Ben Jonson, Dryden, Coleridge and Others* (Oxford, 1957), p. xlv.
- (11) 小さいものへの偏愛は、ダンのみならず17世紀の人々の一つの特徴で、ルネッサンスの遠心的価値観に対して、求心的価値観とも呼ぶべきものである。例えば、トーマス・ブラウンは、次のように述べている：
Indeed, what Reason may not go to School to the wisdom of Bees, Ants, and Spiders? what wise hand teacheth *them* to do what Reason cannot teach *us*? Ruder heads stand amazed at those prodigious pieces of Nature, Whales, Elephants, Dromidaries and Camels... but in these narrow Engines there is more curious Mathematicks; and the civility of these little Citizens more neatly sets forth the Wisdom of their Maker. *Religio Medici* (Everyman's Library, 1959), p. 17.
- (12) J. Donne, *Devotions* (Ann Arbor Paperbacks, 1960), p. 23.
- (13) 川崎寿彦先生、『ジョン・ダンの世界』(近刊予定)の原稿。

- (14) H. C. White, *op. cit.*, p. 98.
- (15) E. Gosse, *The Life and Letters of John Donne* (Glocester, 1959), Vol. I, p. 191.
- (16) 「ダンの *Anniversaries*—Occasional Poetry としての考察」(『名大教養部紀要』, 第4巻, 1960), pp. 73-87.
- (17) I. Walton, *op. cit.*, p. 47.
- (18) *Devotions* (1623) の後のチャールズ一世への献辞.
- (19) W. R. Mueller, *John Donne: Preacher*(Princeton, 1962), p. 77.
- (20) *XXVI Sermons*, 第19番.
- (21) J. Heyward, ed., *John Donne: Complete Poetry and Selected Prose* (London: The Nonesuch Press, 1962), p. 538.
- (22) *A Study of the Imagery of John Donne* (Tokyo, 1953), pp. 79-80.
- (23) J. Webber, *Contrary Music* (Madison, 1963), p. 85.
- (24) これについては、バスの中での質問にすぐ葉書で答えて下さった新井明先生、具体的に多くのヒントを与えて下さった川崎寿彦先生に負う所多大である。
- (25) *English Literature in the Earlier Seventeenth Century, 1600-1660* (Oxford, 1959), p. 335.
- (26) A. O. Lovejoy, *op. cit.*, pp. 302, 83.
- (27) G. R. Potter and E. M. Simpson, ed., *The Sermons of John Donne* (Berkeley and Los Angeles, 1953-1962), Vol. II, p. 253.
- (28) *Ibid.*, Vol. VII, p. 139.
- (29) D. Bush, *op. cit.*, p. 319.
- (30) G. R. Potter and E. M. Simpson, ed., *op. cit.*, Vol. IV, p. 49.
- (31) *Ibid.*, Vol. VI, pp. 250-251.
- (32) *Ibid.*, p. 256; Vol. II, p. 227.